

[博士論文審査要旨]

申請者 村上善紀

論文題目 組織における階層間の情報伝達一分類枠組みと促進要因に着目して一

審査員 加藤俊彦

沼上 幹

島本 実

本論文は、複数年度にわたり日本の大手企業で実施された質問票調査に基づくデータ分析から、事業組織の階層間での情報伝達に影響を与える要因を探ることを主たる目的としている。組織の階層間での情報伝達に関する研究は、これまでも展開されてきた。しかしながら、既存研究では、伝達される情報の内容に関して、特に区分されることなく研究が進められており、情報伝達に影響を与える要因に関しても、統一的な見解は存在しておらず、異なる要因が個別に議論されてきた。

このような既存研究の問題に対して、本論文では、情報流の方向の違いと内容の違いから、「上から下への戦略情報」・「下から上への戦略情報」・「下から上への現場の悪い情報」という3つの階層間の情報伝達に関する類型を設定して、総合的な考察が展開される。これらの変数を従属変数とする重回帰分析を中心に行われた実証分析からは、階層間の情報伝達では組織の構造要因とリーダーシップを中心とするプロセス要因の双方が重要な役割を果たすことが、明らかにされる。そのうち重要と思われる個別の分析結果は、次の3点である。(1)すべての種類の情報伝達において、組織規模の拡大から生じる「公式ルート距離」の拡大が負の影響を与える。(2)情報の種類によって、影響を与えるリーダーシップが異なる。特に注目されるのは、同じ下から上への情報伝達であっても、「戦略情報」では「支持的リーダーシップ」が正の影響を与えるのに対して、「現場の悪い情報」では「関与的リーダーシップ」からの正の影響が強い。(3)「上から下への戦略情報」においては、計画の参照度や計画作成への参画の程度が正の影響を与える。

本論文の重要な貢献として考えられるのは、次の3点である。第1に、従来の研究では「創発戦略」「上方影響力」「問題の売り込み(issue-selling)」など、類似する問題意識に立脚しながらも独立して展開された研究を丹念に考察した上で、統合的に実証分析を進めた点である。第2に、情報の種類によって、影響を与えるリーダーシップ要因が異なるという指摘をはじめとして、伝達される情報の内容を区分して分析を進めることで、新たな知見を導出した点である。第3に、複数回にわたる大規模な質問票調査に基づいた分析を行うことによって、分析結果の安定性に関しても考察されている点である。

他方で、より強い理論志向性の下でもう一段深い考察を加えることにより、本論文で分析対象としたデータから、より豊かな知見が生み出される可能性は少なくないと思われる。しかしながら、筆者は本論文での分析や考察の限界を十分認識していることが口頭試問で確認されており、そのような問題は今後の研究活動の進展によって順次解決されると思われる。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものとして判断する。